

中堅教諭等資質向上研修を振り返って

英語科教諭 高橋 恵

1. はじめに

この一年間の研修を通して、様々なことを学び、改めて理解し直した事柄や新しい発見が多々あった。これまで、機会ある毎に様々な研修を受けてきたが、今回の研修ほど実体験を意識しながら学ぶことができた研修はなかったように感じる。それが、10年経過したことの意味なのだと実感した。これまでは、一人の教職員としての自分しか意識できなかったが、今後は、組織の一員として広い視野をもち、参画できる教員を目指して取り組みたい。

2. 校外研修

(1) 総合教育センター研修

総合教育センター研修は第Ⅰ期から第Ⅴ期までの計5日間の研修であった。学校運営におけるリーダーシップや危機管理、教育相談を含めた生徒指導、専門性に基づく教科指導など、教育現場の実情と対応させながら学ぶことができた。中でも、特に印象に残り、今後、さらに深めていきたいと考えている内容がキャリア教育である。キャリア教育の在り方については、ここ10年間程の間に盛んに議論されてきたが、新学習指導要領における内容や位置づけを、新たに理解することができた。キャリア教育を考えると、生徒の刺激になる要素が豊富にある。地域連携や社会的・職業的な関わりが意識された体験活動が頻繁に行われている。進路を意識した就職・進路ガイダンスも含まれる。研修では、教科等での学びとキャリア教育での学びがどのような接点をもつのか、生徒に明示すべきであると学んだ。教える側も学ぶ側も、互いに目標や意義を理解した上で学習することが効率的である。学習の目的を言葉や文字で具体的に伝えるのと同時に、必要な内容の選択・精選を教える側が考えなくてはいけない。目の前の生徒にとって、どんな内容を、どのくらいの頻度で、どのように学ばせたいか、計画を練り、実践を通して改良・改善されるべきだと考える。今後の教育活動全体を通して積極的な関わりができるよう一層努力したい。

(2) 高校教育課研修

①授業研修

今年度の英語科の授業研修は、令和元年9月2日(月)に秋田県立秋田西高等学校の1年生を対象に実施された。今回の自分の役割は、もう一人の研修教諭と半分ずつ区切った授業展開であった。私は、主に導入部分の活動を展開したが、後半に続く先生が、私の授業の趣旨をしっかりと汲み取ったうえで、授業構築してくださったおかげで、流れを途絶えさせることなく一貫した授業展開ができたことが有り難かった。指導主事の先生からのご助言の中には、①英語の使用頻度を維持する展開の工夫：そのためには生徒の実態に合わせた英語の使用を意識すること、②生

徒の意見を求める発問、特に” Why?” を使った発問の工夫：意図した解答を得るためには、段階を分けて複数の発問をし、スモールステップを踏む必要があることを意識すること、などが挙げられた。

「目の前の生徒を・・・、あるいは目の前の生徒に・・・」と思って毎日授業しているが、別の学校で実践できたことにより、今回はその意識に対して自分がどれだけ対応できているか、客観的にみることができた気がする。目の前の生徒の実態を肌で感じ、与えられた時間内で目標とする授業を展開する、という使命を果たす研修は、自分を試す意味でも、客観的に評価する意味でも大変貴重な時間であった。協力校の皆さんに感謝するとともに、指導力向上のために、さらなる努力を続けたいと強く感じている。

② 選択研修

令和元年7月4日（木）に秋田県総合教育センターで行われたC講座 JTE English Workshopに参加した。この研修は、全校種対象で教員自身の英語運用能力の向上を図ることが目的であったため、まさに英語漬けの環境であった。さらには、異校種間の情報共有ができたことで、新たな気づきとそれらを基に新たな目標をもつことができた。英語学習者の学習レベルを問わず展開できる活動の実践例をたくさん紹介してもらった。語彙や授業展開は生徒の実情に合わせて工夫が必要であるが、題材選びや時期をうまく考慮しながら幅広く応用できると感じた。私は、「現実的な言葉の運用」が英語教育には欠かせないと考えている。どんなにつたない英語であっても、「相手に伝わる」喜びが英語学習の大きな原動力になるはずだ。そのために、如何にして「現実的な」英語使用の場面を構築するかが教員に求められる課題であり、日々の授業の在り方を考えることである。様々な活動を効果的に授業に活用できるよう、教材研究したい。

令和元年7月26日（金）から27日（土）までの二日間、羽後町立図書館で研修させていただいた。研修に際し、図書館利用者が多岐にわたるであろうことを見据え、運営に関してどのような工夫がなされているのかを学びたいと考えていた。その点に関して、蔵書内容の精選、利用者増を目的とした広報活動や催し物の企画・運営、館内の環境整備等において、様々な考慮・工夫されていることを学んだ。今後の課題としては、利用者の増加が大きな目標であり、特に年代の偏りを無くすための取り組みを重点的に行っていくようである。利用者のニーズを分析し、必要な対策を練る点は、私たちの日々の業務と相通じるものがあると感じた。相手がある仕事は、やはり相手のことを理解し、そのニーズにいかに対応していけるかを日々、研究・工夫する必要があると実感した。私たちの職業における日々の取り組みがまさにその通りであるが、職種が違っても研鑽を積む姿勢に変わりはない。改めて自分を見直す機会となった。

3. 校内研修

校内研修においては、校長先生、教頭先生をはじめ、多くの先生方に学びの機会をいただき、感謝の気持ちでいっぱいである。お忙しい中時間を割いていただき、それぞれの立場から様々

な視点でご指導いただいた。各分掌の働きや役割、学校組織としての運営について実践的な内容を学ぶ機会となり、毎日の業務に活かせる貴重な学びであった。生徒の実態を把握し、連携を通じて組織として関わっていくことの重要性を改めて考える研修となった。

4. 特定課題研究

本校の特色の一つである少人数での学習活動を活かして、英語による発信力や表現力を身に付け、向上させる効果的な少人数学習について探究した。具体的な方策としては、①CAN-DOリストの活用②学習目標と学習過程の提示と生徒による自己評価の実施（ルーブリックの活用）③深い学びにつながる「問い」の工夫④パフォーマンステストの実施、である。

学力の向上や検定合格という点においては、成果が出ているとは決して言えないのだが、一方で、英語を使うことや英語を使ってコミュニケーションするという点においては、成長があったと自負している。使う英語はつたないものであっても、「英語を使おう」という意識の向上は明らかに見られた。教室内での英語使用はもちろんだが、自宅で聞く英語音楽を口ずさむ様子や英語で手紙を書いて添削を頼みに来る生徒がいるというのは、非常に嬉しい。英語学習本来の目的である「ツールとしての英語」を身に着けようと努力する生徒の応援ができる教員であること、生徒に必要な英語学習を提供するために多くの選択肢をもった教員であることを目標に、今後も研鑽を積みたい。

5. おわりに

研修を通して、これまでの自分を振り返りつつ、これからの自分をどう創り上げていくか、について考える機会がたくさんあった。原点に立ち返る瞬間があったり、苦しかったこと・充実していたことを思い出しながら、これまでの自分のキャリアを思い返したりした。研修が始まるまでは、どんなにしんどいことが待っているのだろう、と不安に思っていたが、実際に研修を受けると、その度に新鮮な気持ちで話を聞くことができたり、他の先生方と意見を交換することで、これまでの積み重ねを感じたりする場面が多々あった。

一年間、様々な研修を受講してきたが、初任者研修時との明らかな違いは、研修の内容を具体的な状況に置き換えて、学ぶことができるようになった点である。自分が過ごしてきた時間の中で様々な局面があり、それらを研修内容とリンクさせながら受講できたことで、より具体的に内容を受け止め、考えることができた。これまでは必死で過ごしてきた日々であったが、方向性の再確認や昨今の教育現場における最新状況などを学んだことにより、今後は確固たる根拠に基づいて仕事をしていきたいと決意新たにしている。現状に甘んじることなく、学び続ける姿勢をもった教員でありたい。

最後になりましたが、校長先生をはじめ、ご協力いただきました多くの先生方に感謝申し上げます。今後ご指導よろしく願いいたします。